

銀賞

理解しようとする心

横須賀市立池上中学校三年

鳥海 壮平

みなさんは「発達障害」という障害があることを知っていますか？
発達障害といっても様々なものがあるのですが、簡単に言うと、生まれつきの脳機能の障害のことです。

僕の弟は三歳のころに、発達障害の一つである「自閉症」と診断されました。また、知的障害も伴っていました。弟に障害があるとわかったころ、母は泣きながらこう言っていました。

「なぜこの子を障害のある子に産んでしまったのだろう。障害を持っているなら、この子は生まれないうちがよかったかも知れない。」
当時の僕は、母のこの言葉が大嫌いでした。弟の存在を否定され、弟はこの世にいらなと言われてるように感じ、母に対し憎悪の念を持っていました。しかし、弟と過ごしていくうちに、母があの言葉を言ってしまった気持ちが変わるようになりました。

自閉症の人の特徴の一つとして、行動に落ち着きがありません。僕の弟も例外ではなく、普段の生活の中で手を動かしていることが多いです。また、先ほど言った通り知的障害も伴っているので、全

般的な知的機能の発達が普通の人に比べ遅いです。そのため、今年で十三歳になるにもかかわらず、弟はしゃべることができないため、いつも「うー。」や「あー。」などと言っています。そんな様子なので、家族で出かけると、弟を変な生き物を見るような目で見られることがあります。僕はそんな周囲の視線が嫌で、弟と一緒に出かけたくない時期がありました。でも、ずっと家にいるわけにもいかなないので、弟と出かけるときは弟と距離をとって歩き、他人のふりをしているときもありました。

また、自閉症の人たちは環境の変化に影響されます。例えば、学校が夏休みになる。季節が変わるといった些細な変化でも影響され、心が乱れてしまいます。僕の弟は三年に一度くらいのペースでそんな年があり、その一年間は毎日が地獄のようです。学校から帰ってくるなり泣き喚いたり、母が作ったご飯をぐちゃぐちゃにするなどの行為が日常茶飯事でした。そんな年には僕も母も毎日弟に対し怒り、ストレスがたまり、心がすり減っていく思いでした。

今まで述べてきたように、一緒にいると大変な弟ですが、今では大切な家族の一人として思えるようになりました。そう思えるようになったのは、弟が小学校六年生のときでした。弟の通っていた養護学校には、宿泊学習といって、年一度、一泊二日で学校に泊まっ

て様々なことを学ぶ。という行事があります。それは毎年あるので、今までは何も感じませんでした。ですが、その年だけは違いました。弟が宿泊学習の日の夜。初めは、うるさい奴がいなくて、静かな夜が過ごせる。と内心喜んでいたのですが、夕食の時間になりいつものように席に座ると、いつも目の前に座っている弟がいなく、寂しさを感じました、その時、僕は気づいたのです。弟の存在が、いかに大切かを。僕の父は仕事の関係で家にいないことが多く、母と弟と僕の三人だけの日が普通です。そんな中でも、寂しさを感じずに頑張ったのは、弟がいてくれたからです。そのことに気づいたとき、心の中がストーブで暖められていくような、そんな気持ちになりました。そして、弟を大切な家族の一人として、心からそう思えるようになりました。

僕は弟と十年以上過ごしていくなかで、発達障害の人たちと接する上で大切なことを学びました。それは、その人を「理解」しようとして努力することです。発達障害の人はコミュニケーションが苦手です。しかし、こちらに自分の気持ちを伝えようと、様々な行動を取ります。それは一見不可解な行動に見えますが、それを無視するのではなく、真摯に向き合うことで、その人の伝えようとしていることが、少しでもわかるようになります。実際に僕も、いろいろと試

行錯誤していくなかで、弟の伝えようとしていることが少しですがわかるようになりました。そしてこの事は、発達障害の人だけではなく、世界中の人にいえることだと思います。言葉が違う。肌・目の色が違う。文化が違うなどなど、自分と違うからといってその人を拒絶するのではなく、心の扉を開いて、相手のことを理解しようとする。そうすることで、相手の様々な面を知ることができる。それが、今世界中にある差別や偏見をなくす、第一歩になると僕は信じています。